

〈資料〉

スペイン語の悲しみの表現

— ラウラ・エスキベルとミゲル・デリベスの作品に見られる

llorar と lágrimas

松下直弘

要旨

スペイン語圏の作家たちは、人物の悲しみの表情、泣く姿をどのように描いているだろうか。ラウラ・エスキベルとミゲル・デリベスの代表作から、スペイン語の動詞 llorar や名詞 lágrimas を含む用例を集め、それぞれの作風について考察した。ラウラ・エスキベルは自然に涙を流す主人公の姿を描き、ミゲル・デリベスは、泣きたい気持ちを抑えようとしても、こらえ切れなくなって涙を流す少年の姿を描いている。どちらの場合も、繰り返し用いられる llorar や lágrimas には、言葉ではあらわせない作中人物の心情が映し出されている。

キーワード：泣く、涙、llorar, lágrimas, スペイン語の表現

はじめに

スペイン語の動詞 llorar には「涙を流す」「泣く」「(を) 悲しむ、嘆く」などの意味がある⁽¹⁾。スペイン語圏の作家たちは、作中人物の泣く姿を描くときに、この語をどのように用いているだろうか。メキシコの作家ラウラ・エスキベル (Laura Esquivel 1950-) とスペインの作家ミゲル・デリベス (Miguel Delibes 1920-2010) の代表作からさまざまな用例を集め、どんな特徴が見られるか考察してみたい。また「涙」をあらわす名詞 lágrima

(複数形 lágrimas) や「泣くこと」をあらわす名詞 llanto についても、どのような表現の中で用いられているか調べてみようと思う。

涙の力—— ラウラ・エスキベルが描いた「泣く女」

メキシコのラウラ・エスキベル (Laura Esquivel) は、1989 年に著した『赤い薔薇ソースの伝説』(*Como agua para chocolate*)⁽²⁾ によって、たちまちベストセラー作家となった。一人称単数の語り手によって、その大叔母にあたるティタ (Tita) の生涯が少しずつ紹介されていく。作品は、まだ母親の胎内にいたティタが泣く場面で始まっている。

Dicen que Tita era tan sensible que desde que estaba en el vientre de mi bisabuela *lloraba y lloraba* cuando ésta picaba cebolla; su *llanto* era tan fuerte que Nacha, la cocinera de la casa, que era medio sorda, lo escuchaba sin esforzarse. (p. 9)⁽³⁾

ティタはとても敏感だったから、私の曾祖母が玉ねぎを刻むと、その胎内にいたときからよく泣いたそうだ。泣き声は大きく、耳が遠かった料理人のナチャにも、難なく聞こえたほどだった⁽⁴⁾。

ティタが泣く様子は *lloraba y lloraba* (泣いて泣いて泣きどおしだった) と、同じ語を重ねて強めている。さらに、su llanto era tan fuerte (その泣き声はあまりにも大きかった) では形容詞 fuerte を用いて、力強いしかりした泣き声だったことをあらわしている。

Tita nació *llorando* de antemano, tal vez porque ella sabía que su oráculo determinaba que en esta vida le estaba negado el matrimonio. Contaba Nacha que Tita fue literalmente empujada a

este mundo por un torrente impresionante de *lágrimas* que se desbordaron sobre la mesa y el piso de la cocina. (p.10)

ティタは前もって十分泣いてから生まれてきた。自分がこの世で結婚できない運命だということを、たぶん知っていたからだろう。ナチャの話によると、ティタは驚くような涙の激流に押し流されて生まれてきた。ほとばしる涙で、テーブルや台所の床はたちまち水浸しになったという。

破水を涙のイメージに置き換えることで、作者はティタの人生がどのように展開するかを象徴的に描いている。末娘は嫁がずに親の面倒を見るというのが、ティタの生まれた土地の習わしであり、家の掟だった。いかに不合理なことだと思えても、ティタはそれに逆らうことができない。さらに, un torrente impresionante de lágrimas (驚くような涙の激流) という比喩によって、ティタの辛くて悲しい境遇を強調している。

この作品のユニークさは、泣くというしぐさが厨房でよく見られる点にある。ティタはすでに胎内で過敏に反応していたように、玉ねぎの匂いを嗅いだり、玉ねぎを刻む際に必ず涙を流す。

Y como toda la vida, al sentir el olor que despedía la cebolla, las *lágrimas* hicieron su aparición. *Lloró* como no lo hacía desde el día en que nació. (p.92)

ずっとそうだったように、玉ねぎの発する匂いを感じたとき、自然に涙が出てきた。生まれて以来、こんなに泣いたことがなかったというぐらい泣いた。

Tita lloraba mientras picaba la cebolla. (p.105)

ティタは玉ねぎを刻みながら涙を流していた。

しかし、食材の刺激を受けて自然に流れ出る涙であったとしても、それは、ティタの心の奥にある深い悲しみをあらわしているのではないだろうか。長年ティタの傍にいて、彼女のことを誰よりも理解しているナチャは、厨房で何度もティタを慰める⁽⁵⁾。

—Ya no hay nadie en la cocina mi niña, *llora* ahora,(...). (p. 26)

「台所にはもう誰もいなくなったよ。さあ、思い切り泣きなさい」

Y así, abrazadas, permanecieron *llorando* hasta que a Tita no le quedaron más *lágrimas* en los ojos. (p. 27)

こうして、二人は抱き合ったまま泣き続けた。涙が涸れてティタの目に涙が浮かばなくなるまで。

生まれたときから一日の大半を厨房で過ごすティタは、味覚や嗅覚が発達しているが、彼女にはさらに天性の特別な力が備わっていた。涙の力である。その不思議な力が顕著にあらわれるのは、姉の結婚披露宴の場面である。ティタの涙が混じったケーキを口に運んだものは皆、言いようのない懐かしさに包まれて涙を流し始める。

Una inmensa nostalgia se adueñaba de todos los presentes en cuanto le daban el primer bocado al pastel. Inclusive Pedro, siempre tan propio, hacía un esfuerzo tremendo por contener las *lágrimas*. Y Mamá Elena, que ni cuando su esposo murió había derramado una infeliz *lágrima*, *lloraba* silenciosamente.

ケーキを一口噛んだ途端、出席者たち全員が、どこまでも広がる懐かしい気持ちにとらわれた。いつもしっかりしているペドロさえ、涙が出そうになるのを必死でこらえていた。そして、ママ・エレナは、

夫が亡くなったときさえ悲しみの涙を流さなかったのに、今は静かに泣いていた。

これは、涙の働き、涙が持つ力を見事に示している場面ではないだろう。なぜかわからないが泣けてくる、涙が出る。人間が持つそうした自然な感情や感性を、われわれはもっと信じていいのだと、作者ラウラ・エスキベルは肯定しているように見える。ティタの涙は自分だけのものではなく、周りにいる人たちの共感を呼ぶ涙でもあった。

土地の習わしと家の掟に従って、ひたすら家族のために働き続け、泣き続けたティタの運命が大きく変わるのは、12章から成る作品の最終章である。39歳になったティタは、15歳のときから一途に思い続けたベドロとやっと結ばれる。そのときのティタの喜びは、頬を流れ落ちる涙で簡潔にあらわされている。

Unas *lágrimas* rodaron lentamente por sus mejillas. Sus primeras *lágrimas* de felicidad. (p.166)

涙のしずくが、彼女の頬を伝ってゆっくりこぼれ落ちた。彼女にとっては初めての幸せの涙だった。

真の喜びやうれしさを語るのに多くの言葉は要らない。母親の胎内にいたときから泣き始め、おびただしい量の涙を流したティタは、わずか数滴の涙 (*unas lágrimas*) で、あふれる思いをあらわしている。

『赤い薔薇ソースの伝説』は、いわゆる純文学の名作とは異なっている。これは、映画のシナリオライターをしていたラウラ・エスキベルが小説家としてデビューした作品で、12章に分けられ、12回の連載小説の体裁をとっている⁽⁶⁾。それぞれに料理のレシピが付けられ、主人公ティタが料理を作る様子がたっぷり描写されている。いわば料理小説であり、筋の運び

に関しては19世紀から盛んになった大衆小説を意識して書かれている。それだけに、一般読者に訴える力を持った作中人物の泣くしぐさ、涙を流す場面は重要だと言える。作品冒頭での誇張された涙のイメージ、主人公ティタが最後に見せる喜びの涙の簡素なイメージ、その鮮やかな対照がこの作品を成功させている。

ラウラ・エスキベルの文体の特徴

ラウラ・エスキベルの文体で顕著なのは、動詞 *llorar* の強調である。前述したとおり、*lloraba y lloraba* と同一語の繰り返しが見られる。さらに多いのは *llorar* + 副詞（あるいは副詞相当の語）で、どのように泣いたか説明することで、意味を強めている（*llorando desconsoladamente*, *lloraba desenfrenadamente*, *lloraba muchísimo* など）。また、「泣き始めた」と「泣きやんだ」という表現も見られる。動詞 *llorar* が動詞句 *empezar a...*（～し始める）と *dejar de...*（～するのをやめる）の中で計4回使われている（*empezó a llorar nuevamente*, *ya deja de llorar*, *no dejó de llorar* など）。そして「～が泣いているのを見かける、～が泣いているのが聞こえた」という描写も数例見られる（*Me choca verte llorar*, *lo había escuchado llorar*, *te ve llorando* など）。

涙をあらわす *lágrimas* の用例になると、ずっと多くなり、30回を超える。単なる涙ではなく、どのような涙だったかが形容詞で説明されている（*amargas lágrimas*, *una infeliz lágrima*, *sus primeras lágrimas* など）。そして、*lágrimas* も強調表現の中でよく用いられている（*no le quedaron más lágrimas*, *se emocionaron hasta las lágrimas*, *bañada en lágrimas* など）。さらに、目に涙が浮かび、しずくがこぼれ落ちる様子が詳しく描写されることで、そのときの作中人物の心理が映し出されている（*las lágrimas hicieron su aparición*, *dejó que unas lágrimas se deslizaran por su rostro*,

unas lágrimas rodaron lentamente por sus mejillas など)。

言葉にならない涙——ミゲル・デリベスが描いた少年の涙

ミゲル・デリベス (Miguel Delibes) は、長い創作活動の中で、一貫して、人間の無垢な部分を見出そうと努めた作家である。その意味で、少年の純真な心の世界を描いた小説『道』 (*El camino*, 1950) は、彼の代表作の一つと言える⁽⁷⁾。

この作品は、中学に進学するためにひとり村を出て行くことになった11歳の少年ダニエルが、旅立ちの前、眠られない夜を過ごす場面で始まっている。家族や友人と過ごした日々、村で暮らす人々の姿、いくつものエピソード、頭に浮かぶさまざまな思い出に浸っているうちに、とうとう朝を迎えてしまう。

全187頁の長さだが⁽⁸⁾、そこには村に生きる人々の日々の営み、泣いたり笑ったりする老若男女の姿が、少年の目を通して描かれている。

ベッドで寝返りを打つダニエルの頭にまず浮かんだのは、旅立ちの日、見送りの人たちの前で自分が涙を見せてしまうのではないかという不安だった。

Presintió la escena de la partida y pensó que no sabría contener las *lágrimas*, por más que su amigo Roque, el Moñigo, le dijese que un hombre bien hombre no debe *llorar* ni ante la muerte del padre. (p. 80)⁽⁹⁾

やがて訪れる出発の光景を想像してみた。友だちのロケ（あだ名はエル・モニーゴ）は⁽¹⁰⁾、「たとえ父親の死を前にしても、男らしい男は泣くものじゃない」と言っていたけど、ほくは涙をこらえきれないだろうな、とダニエルは思った⁽¹¹⁾。

ダニエルの進学を決めたのはチーズ職人の父親だった。息子には、村で家業を継がせるより、学問を修めて成功者になる道を選ばせようとした。しかし、育った山間の村に愛着を感じているダニエルには、村を離れることが何よりも辛かった。11歳の一人息子としばらく離れて暮らすことになる母親も、思わず涙を流す。

Su madre *lloriqueaba* unas horas antes al hacer, junto a él, el inventario de sus ropas. (p. 82)

数時間前、ダニエルの母親は、傍で息子の衣服を点検しながら弱々しく泣いていた。

Su madre se pasó el envés de la mano por la punta de la nariz remangada y *sorbió una moquita*. «El momento debe de ser muy especial cuando la madre hace eso que otras veces me prohíbe hacer a mí», pensó el Mochuelo. Y sintió unos sinceros y apremiantes deseos de *llorar*. (p. 82)

彼の母親は手の甲を鼻の先に当てて、鼻をすすった。(母さんが、ぼくにやってはいけないと言っていたことをするのは、今が特別なときだからに違いない)とモチュエロ(ダニエルのあだ名)は思った。そして、胸の奥からわっと泣き出したい気持ちになった。

La madre *gimoteó*, mientras recogía en un bote oxidado las migas de pan abandonadas encima de la mesa. (p. 84)

テーブルの上に置かれたままになっていたパンの切れ端を錆びた容器にしまいながら、母親はめそめそ泣いた。

ここでは、動詞 *llorar* の代わりに *lloriquear* (弱々しく泣く、すすり泣

く), *sorber una moquita* (鼻をすする), *gimotear* (めそめそ泣く) などが用いられ、泣く様子が細やかに描き分けられている。

この小説では、ダニエルの遊び仲間たち、学童や就学前の子どもたちの姿が克明に描かれているが、泣くしぐさを見せるのは、むしろ大人たちである。男も女も、さまざまな場面で泣いている。特に、母親のそれまでとは違う泣く姿に驚いたとき、ダニエルは、大人の世界を垣間見たのではないだろうか。大人たちの泣く姿、それはこれから何年か先、ダニエルをはじめ、多くの子どもたちが成長するにつれて経験することになる人生の悲しみを暗示しているように見える。

この作品でコミカルな役を演じているギンディーリャ (唐辛子) 姉妹は、村の中で一風変わった存在だが、彼女たちが派手に泣く場面も見せ場になっている。

La Guindilla mayor respetó el *llanto* de su hermana. El *llanto* era necesario para lavar la conciencia. Cuando Irene se incorporó, las dos hermanas se miraron de nuevo a los ojos. Apenas precisaban de palabras para entenderse. (p. 136)

ギンディーリャ姉妹の姉は、妹が号泣するのを止めなかった。涙は心を洗い清めるのに必要だった。妹のイレーネが上体を起こすと、二人はもう一度見つめ合った。互いに相手の胸の内を理解するのに、言葉はほとんど必要なかった。

La Guindilla blandía el puño en el aire y *lloraba* de rabia e impotencia:

— ¡Golfos! ¡Sinvergüenzas! ¡Vosotros teníais que ser! ¡Me habéis abrasado el gato! ¡Pero ya os daré yo! ¡Os vais a acordar de esto!
(p. 196)

ギンディーリャお婆さんはこぶしを振り上げ、怒りともどかしさのあまり、泣き叫びながら言った。

「いたずら小僧たち！ 恥知らず！ おまえたちに違いない！ あたしの大事な猫の毛を焦がしただろう！ でも、そのうちお返しするからね！ よく覚えておき！」

ここでは、名詞 *llanto*（泣くこと、号泣）が用いられ、さらに動詞 *llorar* が「泣き叫ぶ」意味で用いられている。

ほとんどの村人が喜怒哀楽をはっきり示すのに対して、ひとりだけ常に静かな表情を浮かべている人物がいる。メキシコ帰りのヘラルドである。アメリカ大陸に渡り、富を築いて故郷に錦を飾った者はインディアーノ (*indiano*) と呼ばれた。ヘラルドがすっかり変わってしまった様子は、泣くしぐさにもあらわれている。

Gerardo, que ya entonces era el Indiano, *lloró* un rato en el cementerio, junto a la iglesia, pero no *lloró* con los mocos colgando como cuando pequeño, ni se le caía la baba como entonces, sino que *lloró* en silencio y sin apenas verter *lágrimas*, como decía el ama de don Antonino, el marqués, que *lloraban* en las ciudades los elegantes. (pp.143-144)

ヘラルドはその頃すでに帰国していて、聖堂の近くにある墓地でしばらく泣いた。しかし、子どもの頃のように鼻水を垂らして泣きはしなかったし、よだれを垂らすこともなかった。静かに、ほとんど涙を流すことなく泣いた。侯爵と呼ばれているアントニオさんの家政婦が言っていたように、都会で立派な身なりをした人たちが見せる泣き方と同じだった。

動詞 *llorar* が繰り返し用いられているが、*verter lágrimas* (涙を流す) も用いられている。特に *lloró en silencio y sin apenas verter lágrimas* (静かに、ほとんど涙を流すことなく泣いた) という表現には、長年異郷で暮らしたために別人のようになってしまったヘラルドの姿がよく捉えられている。

ダニエルや遊び友達のロケ (あだ名はエル・モニーゴ) が常に畏敬の念で見ている大人は、片手が不自由なキーノだった。それは、彼が人前で涙を見せない強い男だったからである。だが、そのキーノも泣いたことがあるという事実を知ったときから、少年たちの気持ちに変化が生じる。

Roque, el Moñigo, dejó de admirar y estimar a Quino, el Manco, cuando se enteró de que éste *había llorado* hasta hartarse el día que se murió su mujer. (p. 161)

ロケ (エル・モニーゴ) は、片手の男キーノが、妻の亡くなった日に涙が涸れるまで泣いたことを知ったとき、彼をほめちぎったり、尊敬することをやめてしまった。

冒頭でダニエルの脳裏をよぎった言葉「男は泣くものではない」が伏線となっているかのように、心も体もたくましく、泣いたことなど一度もないキーノが、こらえ切れずに涙を流す場面は印象的である。

Quino, el Manco, según decían, pasó la noche solo, *llorando* junto al cadáver, con la niñita recién nacida en los brazos y acariciando tímidamente, con el retorcido muñón, las lacias e inertes melenas rubias de la difunta. (p. 166)

片手のないキーノは、生まれたばかりの娘を抱き、よじれてしまっ

た不自由なほうの手で、死んだ妻の生気を失った長い金髪をそっと撫でながら、その夜、ただひとり遺体の傍で泣きながら過ごしたそうだ。

Entonces Quino, el Manco, se sentó en una banqueta de la tasca y se echó de bruces sobre el brazo que apoyaba en la mesa, como si *llorara*, o como si acabara de sobrevenirle una gran desgracia. (p. 242)

すると、片手の不自由な男キーノは、居酒屋の椅子に腰かけ、テーブルに乗せた片腕の上につ伏せになった。まるで泣いているような、突然大きな不幸に見舞われたかのような姿で。

キーノがテーブルにつ伏せになる場面では、y lloró（そして泣いた）と言わずに como si llorara（まるで泣いているように）と述べ、さらに、o como si acabara de sobrevenirle una desgracia（あるいは、突然、大きな不幸に見舞われたかのように）と言い換えている。このキーノの無言のしぐさは、涙を流したり、泣き叫ぶことだけではあらわせない、もっと深い悲しみがあることを暗示しているように思える。

作品の最後の場面では、一睡もできないまま朝を迎えたダニエルが、早朝、窓辺にやって来た少女と短い言葉を交わした後、泣き出しそうになるのをこらえながら退くしぐさが描かれている。

Y se retiró de la ventana violentamente, porque sabía que iba a *llorar* y no quería que la Uca-uca le viese. (p. 265)

そして、窓辺から離れた。今にも泣き出すことがわかっていたからだ。ウカ・ウカにそんな自分の姿を見られたくなかったからである。

この描写の後、タイトルにも付けられた「道」を含む次の文章で作品は

閉じられている。

Y cuando empezó a vestirse le invadió una sensación muy vívida y clara de que tomaba un camino distinto del que el Señor le había marcado. Y *lloró*, al fin. (p. 265)

それから服を着替え始めたとき、神様が自分に示された道とは違う道を選んでしまったという、あまりにもはっきりした感覚に襲われた。そして、とうとう泣いてしまった。

「男は泣くものではない」と聞かされ、涙を流すまいと気を付けてきたダニエルだったが、作品の最後でとうとう泣いてしまう。Y *lloró*（そして、泣いてしまった）という極めて簡潔な表現が効果的である。どんなに長い言葉を用いるよりも、この泣くしぐさは少年の心の内をよく語っている。

ミゲル・デリベスの文体の特徴

作品の冒頭で主人公ダニエルの頭に浮かんだフレーズ「男は泣くものではない」(un hombre no debe llorar) は、作品の中で3回出てくる (un hombre bien hombre no debe llorar, al marcharse no debes llorar, un hombre no debe llorar)。しかし、少年は何度も泣き出したい気持ちになっている。その正直な心を映すかのように、Y Daniel, el Mochuelo, sintió que quería llorar(...) と述べている。さらに、「泣きたい気持ち」に相当する deseos de llorar あるいは ganas de llorar という表現が繰り返し用いられ、意味を強めている (sintió unos sinceros y apremiantes deseos de llorar, experimentaba deseos de llorar, experimentó unas ganas enormes de llorar など)。そして、ついにこらえ切れなくなって涙を流す場面が描かれるが、泣き出すのはダニエルだけではない。多くの大人たち

にも、こらえ切れずに泣き出してしまうときがある。そこでは、「～し始める」をあらわす動詞句 *comenzar a...*, *ponerse a...*, *empezar a...* または「急に～し始める」をあらわす動詞句 *romper a...* を用いて、抑え切れない悲しみを描いている (*y comenzó a llorar como una loca, tuvo que pensar en otra cosa para no ponerse a llorar, rompió a llorar, se puso a llorar, empezaron a hipar y a llorar a gritos* など)。さらに、*llorar de...* (～が原因で泣く) も 2 例見られる (*casi lloraba de rabia, lloraba de rabia e impotencia*)。

涙をあらわす *lágrimas* については、ラウラ・エスキベルほど多くはないが、涙をこらえようとする場面 (*no sabría contener las lágrimas*) や涙を流すことを嫌う人物描写 (*era enemigo de lágrimas*) で用いられている。さらに、涙のしずくを大きな雨粒に譬えた (*una lágrima, redonda y apretada como un goterón de lluvia*) や目に涙を浮かべている人物描写 (*llevaba lágrimas en los ojos, casi tenía lágrimas en los ojos*) も見られる。

結 語

ラウラ・エスキベルの『赤い薔薇ソースの伝説』とミゲル・デリベスの『道』の中で、作中人物たちの泣くしずくさがスペイン語でどのように表現されているかを見てきた。スペイン語の動詞 *llorar* には、「しずくなどが滴り落ちる」という意味もあるし、「(を) 嘆き悲しむ」というふうにも他動詞として使われることもある。だが、上記の 2 作では、ほとんど「泣く、涙を流す」という意味で使われている。作中人物たちは、たとえ一時的に涙をこらえたとしても、いつか泣き出す。泣くという人間の自然な行為が動詞 *llorar* によって端的にあらわされている。何度も繰り返し出てくる *llorar* という語は、彼らの悲しみの度合いがいかに大きいかを示している。そして、泣き顔や泣く姿の細部は、名詞 *lágrimas* (涙、涙のしずく) や *llanto* (泣

くこと、号泣）などを用いて描かれている。ひとりひとりの心情が、突然目に見える形になってあらわれる場面である。

涙は言葉で表現できないものを伝える⁽¹²⁾。いや、言葉以上のものを伝える場合もある。ラウラ・エスキベルもミゲル・デリベスも、「泣くこと、涙を流すこと」が、人間にとってどれだけ大きな意味を持っているか、作品を通して読者に提示しているように思える。

Como agua para chocolate で用いられている *llorar* とその関連語

◀ *llorar* ▶

Lo malo de *llorar* cuando uno pica cebolla(...)

(...)el simple hecho de *llorar*(...)

Para ella reír era una manera de *llorar*.

(...)ya deja de *llorar*(...)

A sus 85 años no valía la pena *llorar*, ni lamentarse(...)

(...)empezó a *llorar* nuevamente(...)

Me choca verte *llorar*.

Primero terminas y luego haces lo que quieras, menos *llorar*, ¿me oíste?

(...)pues no dejó de *llorar* en todo el día.

Hasta Esperanza, que no perdía detalle, dejó de *llorar*.

Más tarde lo había escuchado *llorar* quedamente y ella a su vez había fingido no oírlo.

◀ *llorando* ▶

Tita nació *llorando* de antemano(...)

(...)permanecieron *llorando* (...)

Tras ella, entró Chenchá *llorando* desconsoladamente.

Chenchá, corriendo y *llorando* a su lado(...)

(...)estaría *llorando* nuevamente(...)

(...)la abrazó *llorando* desconsoladamente(...)

-Nada más déjame quitar esto de la lumbre y ahorita sigues *llorando*, ¿sí?

(...)toda la gente del rancho te ve *llorando* al lado de Pedro(...)

◀ llora ▶

-Ya no hay nadie en la cocina mi niña, *llora* ahora(...) (2人称单数肯定命令)

-Qué bonito es ver a una mujer enamorada que *llora* de emoción. (直説法現在3人称单数)

◀ lloró ▶

(...)rabiosamente tejió y *lloró* y tejió(...)

Entonces *lloró* en seco(...)

Lloró toda la noche(...)

(...)el niño *lloró* con más fuerza(...)

Lloró como no lo hacía desde el día en que nació.

Durante el entierro Tita realmente *lloró* por su madre.

Tita se abrazó a Gertrudis y *lloró* en su hombro, en silencio.

(...)y *lloró* hasta que se calmó.

◀ lloraron ▶

(...)y juntas *lloraron* un rato(...)

(...)y *lloraron* al recordar los pasos a seguir(...)

< lloraba >

(...) *lloraba y lloraba* cuando ésta picaba cebolla(...)

Algunas veces *lloraba* de balde(...)

(...) *lloraba* silenciosamente.

El bebé *lloraba* exasperado.

(...) Tita *lloraba* mientras picaba la cebolla.

Lloraba muchísimo en cuanto sentía que se alejaba del calor de la estufa

(...)

(...) trataba de dormir a su hija que *lloraba* desenfrenadamente.

Tita, a su lado, *lloraba* desconsolada.

Desde hacía un rato la niña *lloraba*(...)

< había llorado >

(...) ¿por qué *había llorado* tanto cuando lo comió?

< llores >

-¡No *llores* niña!

< llorara >

(...) que Tita *llorara* de esa manera.

< llanto >

(...) su *llanto* era tan fuerte que(...)

(...) no diferenciaba bien las lágrimas de la risa de las del *llanto*.

(...) el *llanto* fue el primer síntoma de una intoxicación rara(...)

(...) abandonó la sala presa de un ataque de *llanto*.

El *llanto* del niño invadió todos los espacios vacíos dentro del corazón de

Tita.

Los gritos de Rosaura se confundían con los del *llanto* apremiante de Esperanza.

(...)estas palabras podrían provocar que Tita estallara en *llanto*(...)

« sollozos »

(...)había ido subiendo gradualmente el tono de sus *sollozos*(...)

Un día los *sollozos* fueron tan fuertes que provocaron(...)

« lágrimas »

(...)un torrente impresionante de *lágrimas*(...)

Nacha barrió el residuo de las *lágrimas*(...)

(...)como las dos sabían la razón de estas *lágrimas*(...)

(...)Tita no diferenciaba bien las *lágrimas* de la risa de las del llanto.

(...)sus *lágrimas* cayeron sobre la mesa(...)

(...)recibiendo sus amargas *lágrimas*(...)

(...)y cuidadito que yo te vea una mala cara o una *lágrima*(...)

Nacha le secaba con su delantal las *lágrimas* que rodaban por la cara de Tita(...)

(...)la masa no podía espesar debido a las *lágrimas* de Tita.

(...)hasta que a Tita no le quedaron más *lágrimas* en los ojos.

No se explicaba de dónde había sacado nuevas *lágrimas*(...)

(...)para ver si las *lágrimas* de Tita no habían alterado el sabor.

(...)hacía un esfuerzo tremendo por contener las *lágrimas*.

(...)había derramado una infeliz *lágrima*(...)

(...)fueron las *lágrimas* que derramó al prepararlo.

(...)se emocionaron hasta las *lágrimas*(...)

-¡Siéntate a trabajar! Y no quiero *lágrimas*.

Tita dejó que unas *lágrimas* se deslizaran por su rostro.

Tras John entró Chenchá bañada en *lágrimas*.

(...)al sentir el olor que despedía la cebolla, las *lágrimas* hicieron su aparición.

Cuando se dio cuenta de que se trataba de las *lágrimas* de Tita(...)

(...)fue testigo de cómo pasó Tita de las *lágrimas* a las sonrisas(...)

(...)al ver en los ojos de su hermana *lágrimas*(...)

Con *lágrimas* en los ojos le rogó que(...)

Secándose las *lágrimas*(...)

(...)la miraba emocionado hasta las *lágrimas*.

Tita los vio irse con *lágrimas* en los ojos.

Por las mejillas de Tita se deslizaron dos *lágrimas*.

Unas *lágrimas* rodaron lentamente por sus mejillas.

Sus primeras *lágrimas* de felicidad.

(...)tampoco sé por qué derramo tantas *lágrimas*(...)

***El camino* で用いられている *llorar* とその関連語**

◁ *llorar* ▷

(...)un hombre bien hombre no debe *llorar*(...)

Y sintió unos sinceros y apremiantes deseos de *llorar*.

(...)y comenzó a *llorar* como una loca(...)

(...)tuvo que pensar en otra cosa para no ponerse a *llorar*.

(...)experimentaba deseos de *llorar*.

La Guindilla menor rompió a *llorar*(...)

La Guindilla mayor se puso a *llorar* acongojada.

Y a la puerta de la vivienda las mujeres empezaron a hipar y a *llorar* a gritos(...)

Y Daniel, el Mochuelo, sintió que quería *llorar* y no se atrevió a hacerlo (...)

Al ver el pájaro se le ablandaron los ojos y comenzó a *llorar* silenciosamente.

(...)y poder *llorar* a raudales sobre las trenzas doradas de la chiquilla (...)

Daniel, el Mochuelo, experimentó unas ganas enormes de *llorar*(...)

Al marcharte no debes *llorar*.

Un hombre no debe *llorar* aunque se le muera su padre(...)

(...)sabía que iba a *llorar*(...)

« llorando »

(...)y se desplomó sobre el tablero de la mesa, *llorando* a moco tendido.

Quino, el Manco, según decían, pasó la noche solo, *llorando* junto al cadáver(...)

La Camila estaba *llorando* también(...)

Las mujeres seguían *llorando* junto al cadáver(...)

Daniel, el Mochuelo, no quiso hablar, pues barruntaba que de hacerlo terminaría *llorando*.

« lloró »

Gerardo, que ya entonces era el Indiano, *lloró* un rato en el cementerio(...)

(...)pero no *lloró* con los mocos colgando como cuando pequeño(...)

(...)sino que *lloró* en silencio(...)

< lloraba >

Por la noche *lloraba*, a solas, en su alcoba, hasta empapar la almohada (...)

Al aproximarse a él casi *lloraba* de rabia(...)

(...) *lloraba* con un hipo atroz.

(...) *lloraba* de rabia e impotencia(...)

Y *lloraba*.

Su madre *lloraba* a su lado(...)

(...)de cuando en cuando volvía la cabeza para indagar si él *lloraba*.

< lloraban >

(...)que *lloraban* en las ciudades los elegantes.

< había llorado >

(...)éste *había llorado* hasta hartarse el día que se murió su mujer.

(...) *había llorado* a la muerte de su mujer(...)

< lloréis >

— No la *lloréis* — dijo — (...)

< llorara >

(...)y se echó de bruces sobre el brazo que apoyaba en la mesa, como si *llorara*(...)

< lloriqueaba >

Su madre *lloriqueaba* unas horas antes(...)

La Guindilla mayor *lloriqueaba* desazonada y hacía cuatro pucheros.

(...)de vez en cuando, *lloriqueaba*, y pedía, entre hipo e hipo, un poquitín de clemencia.

< sollozar >

(...)le ganaba de nuevo un amplio e inmoderado deseo de *sollozar*.

< llanto >

La Guindilla mayor respetó el *llanto* de su hermana.

El *llanto* era necesario para lavar la conciencia.

(...)sabía que su vacilante virilidad acabaría derrumbándose con el *llanto* ante el grupo de energúmenos(...)

El *llanto* se contagió a todos(...)

< sollozo >

(...)y reprimió a medias un *sollozo*:

Se le rompió la voz en un *sollozo*.

(...)se oyó un grito unánime y desgarrado, mezclado con ayes y *sollozos*:

Había, en torno, un silencio abierto sobre cien *sollozos* reprimidos(...)

< lágrimas >

(...)pensó que no sabría contener las *lágrimas*(...)

Seguidamente se limpió una *lágrima*, redonda y apretada como un goterón de lluvia.

Irene, la Guindilla menor, al apearse del tren, llevaba *lágrimas* en los ojos (...)

(...)lloró en silencio y sin apenas verter *lágrimas*(...)

(...)era enemigo de *lágrimas* y de sentimentalismos(...)

Daniel, el Mochuelo, casi tenía *lágrimas* en los ojos.

(...)y cachetes y besos y *lágrimas* de su madre, todo mezclado.

(...)prorrumpir en un torrente de *lágrimas* incontenibles(...)

Y a Tomás se le saltaron las *lágrimas* (...)

(...)en tanto sus *lágrimas* y alaridos se incrementaban.

Había, en torno, un silencio abierto sobre cien sollozos reprimidos, sobre mil *lágrimas* truncadas(...)

《注》

- (1) 例えば, スペイン語の辞書では次のように定義されている。

Llorar v.i. Derramar lágrimas. Fig. Caer un líquido gota a gota. V.t. Sentir vivamente la pérdida de alguien. Sentir mucho: llorar sus desgracias. (Ramón García-Pelayo y Gross, *Diccionario Larousse del español moderno*, Nueva York, Signet, 1983, p. 340)

- (2) Laura Esquivel, *Como agua para chocolate*, México, Planeta, 1989. 原題は *Como agua para chocolate* で, 「激昂, 憤激」をあらわす。ホットミルクを作るときに湯が煮え立つ様子からできたメキシコの成句 *estar como agua para chocolate* (激昂している) の一部である。メキシコで作成された辞書には次のような説明が見られる。

Estar algo o alguien como agua para chocolate Estar a punto de estallar en cólera, en llanto, etc. con cualquier pretexto:(...)(*Diccionario del español usual en México*, México, El Colegio de México, 1996, p. 81)

本稿では, Laura Esquivel, *Como agua para chocolate*, Madrid, Mondadori, 1990 をテキストとして使用した。日本語訳には次のものがある。『赤い薔薇ソースの伝説』西村英一郎訳, 世界文化社, 1993 年。

- (3) 引用ページは前述の Laura Esquivel, *Como agua para chocolate*, Madrid, Mondadori, 1990 のものを指す。また, イタリアックでの強調は引用者による。
- (4) 本稿での引用箇所の日本語はすべて拙訳である。
- (5) 誰よりもティタのことを理解しているナチャは, ティタと似た境遇にあった。いっしょに泣く場面でもそうだが, ティタの涙が混じったケーキを厨房で試食したために, たちまち懐かしい気持ちに包まれ, 一晩中泣き続ける場面でも, ティタへの共感の涙を流していると考えられることができる。
- (6) スペイン語圏では, 読み切り小説や連載小説が廉価な冊子の形で発行さ

れ、大衆に読まれているが、この作品も、1月から12月まで毎月発行される連載小説（novela de entregas mensuales）の形式で綴られている。第1章から第12章まで、毎月のメキシコ料理が紹介されながら、ストーリーが進んでいく。

- (7) Miguel Delibes, *El camino*, Barcelona, Destino, 1950. この作品をミゲル・デリベスの代表作のひとつに挙げている評論家が多いが、Eugenio G. de Nora もそのひとりである。作者の自伝的な要素を取り入れた少年の世界が、瑞々しい感覚で描かれていると、高く評価している。（Eugenio G. de Nora, *La novela española contemporánea* (1939-1967), Madrid, Gredos, 1970, pp. 113-116)
- (8) 本稿では、Miguel Delibes, *El camino*, Barcelona, Planeta, 2010 をテキストとして用いた。この版では、79頁から265頁までの計187頁が作品の本文となっている。日本語訳には次のものがある。
『エル・カミーノ（道）』喜多延鷹訳、彩流社、2000年。
- (9) 引用ページは前述のMiguel Delibes, *El camino*, Barcelona, Planeta, 2010 のものを指す。
- (10) この作品では、登場人物の多くにあだ名が付けられていて、そこに村人たちの人間関係や自然観が反映されているのがわかる。Roque, el Moñigo（牛糞のロケ）、Germán, el Tiñoso（田虫のヘルマン）、Daniel, el Mochuelo（フクロウのダニエル）、la Guindilla mayor（赤唐辛子姉さん、赤唐辛子おばさん）など。
- (11) 本稿での引用箇所の日本語はすべて拙訳である。
- (12) 民俗学者柳田国男が、1940年に「現代文化の問題」という題で講演し、翌年活字になった「涕泣史談」には、次のようなことが書かれている。「今日の有識人に省みられておらぬ事実はいろいろある中に、特に大切だと思われる一つは、泣くということが一種の表現手段であったのを、忘れかかっているということである。言葉を使うよりももっと簡明かつ適切に、自己を表示する方法として、これが用いられていたのだということは、学者がかえって気づかずにいるのではないかと思われる。」（『ちくま日本文学 柳田国男』筑摩書房、2008年、317-318頁）